

# 市民のページ

## お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに関連することなどを紹介していきます。

### その3 兄・覚馬と最初の夫・川崎尚之助

#### 新 島

島八重が最も大きな影響を受けたのは、17歳年上の兄・山本覚馬でした。覚馬は、武芸の才覚が藩に認められ1853年25歳の時に江戸へ2回目の留学に行き、3年間、蘭学や洋式砲術の習得などに努めました。その後、日新館の蘭学の教授となります。覚馬は、日新館で洋式銃を採用しようとはしますが、この先進的な考えは、藩の考え方に合わず周囲から反対されます。

**覚** 馬は改革の必要性を訴え続けますが、通らず、ついに過激な発言が

もとで禁足処分(外出禁止)を受けます。その後、ようやく藩内に意見が認められ、軍備の近代化が進められました。西洋の知識を基に果敢に改革に挑み続けた覚馬の姿は、八重の生き方に大きな影響を与えました。

#### 日 新

新館で覚馬が教え始めた頃、川崎尚之助という人物が覚馬を訪ねてやってきました。尚之助は出石藩(現在の兵庫県)の医師の子で、江戸で覚馬と一緒に蘭学を学んだ仲でした。やがて、尚之助は覚馬と一緒に、日新館で砲術などを教えるようになります。

#### 八 重

重は新島襄の妻として有名ですが、最初の夫は、この川崎尚之助でした。二人は1865年ごろに結婚したようですが、どんな結婚生活だったかは分かっていません。尚之助は洋書を研究したり、大砲などを作ったりして、会津藩に大いに貢献しました。その尚之助ですが、これまでに「会津藩士ではない」とされてきました。しかし、最近の調査の結果、会津藩の藩士名簿に名前が見つかったことから会津藩士だったことが明らかになりました。

#### 維 新

新後、二人は別々の人生を送ります。二人がいつ頃、どんな経緯で離婚したのかは、全く分かっていません。尚之助は斗南に行きましたが、八重は母たちと会津に残り、1870年10月から1年ほど、米沢に出稼ぎに出ています。そして、翌年の10月、八重たちは覚馬を頼って京都に行くのでした。

▼監修…会津歴史考房主宰・野口 信一さん



山本覚馬(同志社大学提供)

覚馬は、その先見性と西洋知識が認められ、維新後、京都府の顧問や京都府議会の初代議長、京都商工会議所の初代会頭に就任しています。明治期の京都の近代化と発展に、大きく貢献しました